

## 【前立腺がんに使われるお薬】

前立腺癌は、男性ホルモンの影響で発育すると言われ、男性ホルモンを出さないようにする治療が従来行われてきました。

最近 LH-RH アゴニストという注射が注目され、頻繁に用いられています。その理由は、去勢や抗男性ホルモン剤投与とほぼ変わらない効果があり、副作用も一般に軽微だからです。去勢術を拒否する患者様には都合がよく、28日ごとに注射を受けるだけで済みます。

前立腺がんの初期にはホルモン療法が行われます。病期に応じて放射線治療、手術療法なども行われることがあります。泌尿器科の医師によくご相談下さい。

### ◆ LH-RH アゴニスト

(リュープリン、ゾラデックス)

去勢と変わらない効果があります。6～7割の方に有効です。間隔が28日を越えると症状が悪化する場合があるので必ずお守り下さい。ほてりや勃起障害が起こることがあります。

### ◆ 抗男性ホルモン剤

(カゾデックス、プロスタール等)

前立腺に直接働いて男性ホルモンの作用を抑えます。6～7割の方に有効です。乳房腫脹や肝障害、勃起障害が起こることがあります。

お薬は効きを良くするために、指示された量、回数を守ることが大切です。また定期的に受診することで病期が良くなっているか、副作用がでていないかが分かれます。

(薬剤師 中川 義浩)

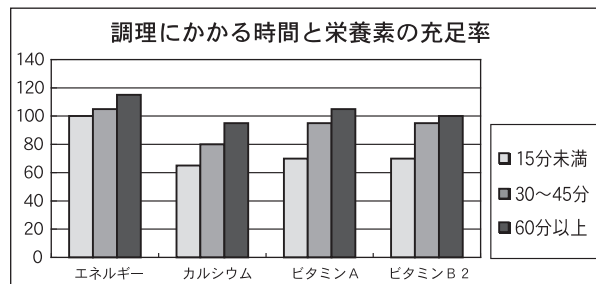
## 【調理時間と栄養素】

日本では昭和30年代後半からめざましい発展とともに私達の生活の中にも便利で快適なライフスタイルや欧米化の食生活が取り入れられてきました。

下の表は厚生労働省の調べによる夕食の調理に要する時間別の摂取量を表したものです。エネルギー、タンパク質はどれも充分足りています。ところが調理にかかる時間が60分未満の場合は、カルシウム、ビタミンA、ビタミンBの不足が目立ちます。

1時間以上かけた料理はどの栄養素もほぼ充足しています。15分以内の調理時間というどうしても市販の惣菜を購入するかインスタント、トト食品の使用が考えられ食品の数が少なくなってしまう。食品の数が少なくなるほど栄養素のバランスがうまく摂れないためともとと微量しか含まれていないビタミン、ミネラル等は不足する傾向があります。

野菜、魚、豆類の調理にはとても時間がかかりますが私達の体には必要不可欠な栄養がいっぱいです。忙しいときはやむを得ないのですが、問題点を理解した上でのインスタント食品等の利用と日々の食卓に野菜、魚、豆類がかけないよう注意して下さい。



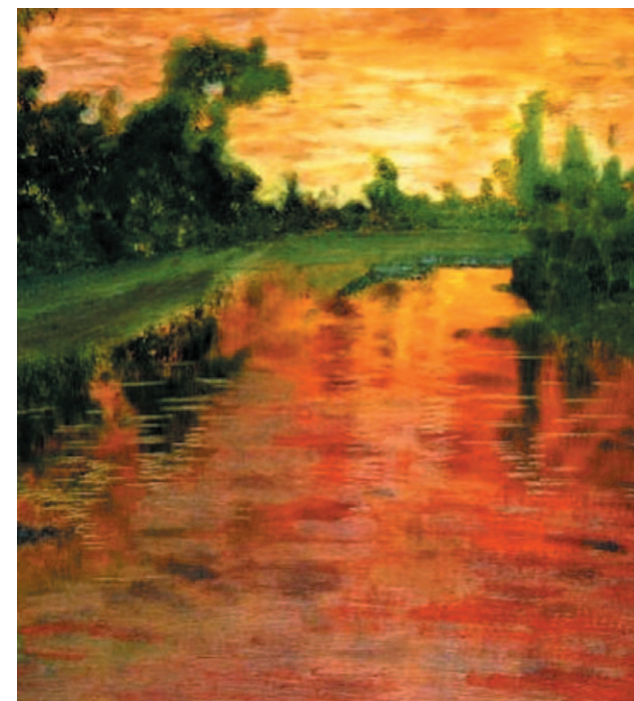
(栄養管理士 橋本 有吏)

# くす通信

第44号

2001.11.1

## 前立腺がん 前立腺がんに使われるお薬 調理時間と栄養素



くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしづみ(薬師書)は医術に関する書物のことを言います。本紙はこのくすにあやかり、健康な生活を送るために情報を提供します。

気楽に読んで健康を守りましょう。

**診療時間 8:30~17:00**

**(診療受付時間 8:30~11:00)**

ただし、急患はいつでも受診できます。

(診療科目) **総合医療センター**(総合診療科、血液・膠原病内科、内分泌・代謝内科、腎臓内科、神経内科、呼吸器科)、**心臓血管センター**(循環器科、心臓血管外科)、**消化器病センター**(消化器科)、**救急医療センター**、精神科、神経科、小児科、外科、小児外科、整形外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、気管食道科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、歯科・口腔外科、人間ドック、脳ドック

### (診療科の特色) : 泌尿器科



診察は月曜から金曜日の午前中(水曜日は手術のため新患のみ)に行っています。

現在は菊川、土岐、陣内、伊藤の4人

の泌尿器科専門医で1日40から50名の診察を行っており、疾患は小児や成人の包茎や女性の尿失禁から悪性腫瘍まで幅広く取り扱っています。

病院の性格上、悪性腫瘍を取り扱うことが多く、手術療法を中心に化学療法から放射線科との連携による放射線治療とさまざまな治療を提供しております。

### 【前立腺がんについて】

皆さん“前立腺”なるものをご存知でしょうか？前立腺は男性にのみある臓器で膀胱の下で尿道を取り囲むように存在し精液の一部を産生しているといわれています。

この前立腺の病気の中でよく話題になるのは“前立腺肥大症”と“前立腺がん”でしょう。

今回は、“前立腺がん”についてお話いたします。

前立腺がんはアメリカでは男性の中でもっとも多い癌で日本ではこれまで少ないと思われてきましたが、1999年の厚生省の発表では「前立腺がんによる死亡数は2015年には1995年の約3倍になる」といわれ、これは他のすべてのがんの中でもっとも高い増加率です。

もともと前立腺がんは高齢者のがんといわれ、患者さんの約90%が60歳以上で占められています。なぜ、日本でこのように前立腺がんが増加するのか？やはり現在増加している他の生活習慣病と同様に高齢化社会となり、食事が欧米化したことが影響しているようです。

では、どうするのか？

当たり前ですが、おしっこに異常を感じたら泌尿器科専門医を受診することをお勧め

します。高齢者の方は特に日本人の美德であった“恥”の心得が強くなかなか受診されないことが多く、また家族にも相談しにくいことなので早期発見の機会を失う場合があります。外来でお話を聞くと「2年前から」とか「実はずっと以前から」という言葉をよく聞きます。

最近では採血だけでも“前立腺がんかどうか”がかなり正確にわかるようになりました。

当院の人間ドックでも取り入れてもらうようになっておりますし、かかりつけの病院で「PSA(ピー・エス・エー)を測って下さい」と依頼すればある程度の診断は可能です。また、治療に関しても他のがんに較べて治療法のバリエーションも多く、お薬と外来での月に一度の注射だけという場合もあります。

60歳を過ぎ、おしっこに何か異常を感じたらまず泌尿器科専門医をおたずねください。

(泌尿器科医長 菊川 浩明)



ホームページ

国立熊本病院

〒860-0008 熊本市二の丸1-5

電話 096(353)6501(代表)

FAX 096(325)2519

<http://www.hosp.go.jp/~knh>